
岸田劉生と“美術批評家”としての和辻哲郎

— 鵠沼時代の交友を中心に

田中 純一郎

発表要旨

岸田劉生(1891-1929)の実証的・伝記的研究の多くは、武者小路實篤をはじめとする白樺派の文学者たちとの関わりに注目するものである。その傍らで、近代日本を代表する哲学者の一人である和辻哲郎(1889-1960)と劉生の交友についてはいまだ詳らかにしない部分が多い。

帝大を卒業後、『ニイチエ研究』や『ゼエレン・キエルケゴオル』で出発した和辻は、名高い『古寺巡礼』により、多くの知識青年たちの共感を得て、後には体系的倫理学の構築者として評価される。しかし、青年期の和辻は第二次『新思潮』の同人として谷崎潤一郎ら耽美派文学運動に関わるだけでなく、大正期の“美術批評家”としての顔を併せもつ。劉生から「僕の仕事に対しての最もよき知己の一人」という信頼を寄せられていたことはあまり知られていない。

同世代である二人の出会いは、後期印象派に影響を受けた若手美術家のフェウザン会や耽美派作家の「パンの会」といった明治末の文化人サークルに遡ることがすでに指摘されている。大正期に入って両者はともに鵠沼に居を定めていた。和辻は当時異端視されることもあった劉生芸術を擁護する論陣を『中央美術』や『思想』誌上に張り、なかでも大正9年(1920)に上梓された『劉生畫集及藝術観』の書評を書き、劉生と活発な意見を交わしたのであった。他にも院展や帝展の日本画について辛辣な批評を寄稿しており、椿貞雄などが出品した再興第五回院展の展評に「そこに在ることの不思議さ」という劉生の有名な字句を引用するなど、“美術批評家”としての和辻の背後には二人の親密な関係が窺える。

また、夫人の実家が横浜の原家と親しい和辻は、気鋭の学者として原三溪の薫陶を受けており、後に有力なパトロンとなる長男の善一郎や西郷健雄を劉生に紹介したとも言われる。劉生にとって原家との接近は、経済的余裕だけでなく三溪園での古美術鑑賞の機会を得ることもつながった。和辻のような文化人とともに、池大雅や田能村竹田、伝毛益《萱草遊狗図》《蜀葵遊猫図》に代表される原家旧蔵の優品を鑑賞した体験は、劉生が「東洋の美」に開眼する転機となったと言える。和辻の「生命なき日本画」という評論では、「宋画の緻密なる写生に神秘なる生命」が宿ることを言及しているが、劉生も宋元画に神秘的な生命感を見出したことはよく知られている。

本発表では、大正6年(1917)から関東大震災までの鵠沼時代における、劉生の造形活動に果たした和辻の役割を再確認することを目的とする。両者は一方的な影響関係にあっただけではなく、共通した思索の軌跡を描いていた。和辻の“美術批評家”としての仕事のなかで劉生はどのような存在であったか、あるいは和辻との交友は劉生の芸術制作に何をもたらしたのか。三溪園での古美術鑑賞が「東洋の美」に目覚める契機として劉生・和辻に共通した体験であったことを指摘し、互いに響きあう二つの個性の共鳴を明らかにしたい。

(学習院大学)